



Remaが表現する 若い世代の日常

— ナイジェリア系ポップミュージックの世界への広がり —

国際コミュニケーション学部 友松 夕香



2022年8月、アフリカ中東部に位置するブルンジ共和国。私はコーヒー産地のンゴジで調査を終え、乗り合いバンでタンガニーカ湖に面したブジュンブラまで戻っていた。山道を軽快に走る車内では、ポップミュージックが流されている。ブルンジに来て以来、街中でよく耳にしてきた楽曲になった。上り下りが続く道に、リズムがぴったり合っていて心地よい。誰が歌っているのだろう。あとで尋ねてみようと思い、録音した。



REMA (2000-)

Virgin Music Label & Artist Service より

ブジュンブラに到着した午後、お世話になっている方々と一緒に炭焼き肉を食べに出かけた。街ではいたるところに野外のバーがあり、新鮮なヤギ肉や牛肉、鶏肉がその場で調理されているのだ。大量飼育された日本の家畜肉とは異なり、味が濃くてとても美味しい。薄くスライスした玉ねぎと一緒に、レモンをたっぷり絞っていただくのがブルンジ流だ。座った席の横に、ちょうどDJブースがあった。ここから音楽が流されている。DJの若い男の子たちに乗り合いバンで録音した音楽を聴いてもらった。アーティストはRema、曲名はCalm Downだという。Remaはどこの国の人なのかと尋ねると、ブルンジでもアフリカ中東部の近隣諸国でもなく、西アフリカのナイジェリアのアーティストだった。

ひと昔前まで、アフリカ大陸で流行するポップミュージックは地域ごとにかなり分かれていた。たとえば、2003～2005年、JICA協力隊員として過ごした西アフリカのブルキナファソでは、コートジボワールやギニア、マリ、セネガル、コンゴなど近隣のフランス語圏のポップミュージックが流れていた。2009～2011年、大学院時代に長期調査をした旧英領のガーナ北部では地域言語の影響が強く、英語より現地のダゴンバ語やマンプリシ語で歌うアーティストの音楽が流行っていた。こうした経験から、アフリカ中東部に位置する旧ベルギー領フランス語圏のブルンジで、遠く離れた西アフリカのナイジェリアのアーティストが英語で歌う音楽が流行していたことは、とても意外だった。

RemaのCalm DownをYouTubeで検索すると、

なんと「世界で人気27位のミュージックビデオ」としてランクインしていた。世界人口でアフリカ大陸の若者人口が占める割合は高いが、彼らだけではCalm Downの再生回数をそこまで押し上げることはできない。誰もがスマホを持ち、YouTubeで日常的に音楽を視聴できるほど稼ぎを得ているわけではないからだ。そんなとき、ちょうどジャマイカに帰国後、米国で親戚を訪問中だったデラス先生とやりとりをした。Calm Downが流れているか聞いてみると、ジャマイカはもちろん米国でも大人気だという。Calm Downがリリースされたのは今年2022年の2月である。ほんの半年足らずで、デジタル空間をとおして米国まで広がっていたのだ。これまで、アフリカ諸国の音楽は、たとえ欧米で注目されても「ワールドミュージック」のカテゴリーから抜け出すことはなかった。それを考えると、大衆によるRemaの人気ぶりは新しい現象である。

Remaの楽曲からは、アフリカ大陸で流行するポップミュージックの変化も読み取れる。以前であれば、アフリカの主体性や反権力・反政権を主張する政治色が強いもの、伝統的音楽の要素を中心に据えたもの、文化的価値観を表現するものが流行っていた。きらびやかな生活を描き、派手なダンスパフォーマンスを取り入れたクラブ系ミュージックは今も人気だ。しかし、これらと比べると、現在21歳のRemaの楽曲は、歌詞もビデオ内容もとても軽やかで素朴だ。そこでは、ごく一般の若い世代の生活、感覚、テイストの日常的なイメージが表現されている。

Remaを含むナイジェリア系の現代ポップミュージックは、世界の音楽業界で“Afrobeats”として知られている。ただし、Remaは自らの音楽を“Afro-Rave”と呼ぶ。ナイジェリアのピジン英語で歌っていることから、アフリカ「現地」のポップミュージックを世界に広げようとする意気込みを感じる。しかし、Remaの楽曲

が「アフリカ」を越え、カリブ海や米国のメインストリームの若い世代の間でも人気になっているのには、国籍にかかわらず、現代の若い世代が共有する価値観の素朴な側面を表現できているからのようにも思う。Remaは、グローバル化したデジタル空間で若い世代の世界観を感じ取り、どこか普遍的に描くことに成功しているのだ。

ところで、ブルンジから帰国する日、お土産を買いにアート工房に立ち寄った。入ったお店で、笑顔が素敵な女の子が話しかけてきた。市内の大学生だが、長期休暇の間、販売のバイトをしているという。日本人だと自己紹介した私に対し、「私、韓国語なら少し知ってます。どんな意味か分からないけど」と韓国語らしい言葉を話してきた。好きなK-POPの楽曲の一部だという。アーティスト名を教えてくれたが、K-POPをほとんど知らない私にはまったくわからない。デジタル時代の到来で、音楽は国民というよりむしろ、国境のみならず言語の壁を越え、若い世代をつなぐものになってきているようだ。